

アリストテレスのピュシス探求

—自然から超自然へ—

古牧徳生*

名寄市立大学保健福祉学部教養教育部

【要旨】 プラトンに学んだアリストテレスは超越的なアイデアを斥け、代わりに事物に内在する形相を描いた。彼が考えていた事物の究極の原理は何であったのかを主に『自然学』や『形而上学』などのいわゆる理論哲学の諸著作から見てみたい。

キーワード：実体、可能態と現実態、質料と形相、不動の動者

序論

西暦前 347 年、プラトンが没すると甥のスペウシッポス (前 395 頃-339) がアカデメイアを継いだ。ディオゲネス・ラエルチオスによれば彼もまた多くの著作を書いたようであるが、¹⁾ 今日では僅かに断片が伝わるのみで具体的に何を唱えていたのか不明である。だが同じプラトンの弟子であるスタゲイロスのアリストテレス(前 384-322)によれば、どうも彼はプラトンが唱えたアイデアを数に置き換えたらしい。

「……われわれが諸学においてまさに原因であると認めているところのもの、すなわち、そのゆえにあらゆる理性やあらゆる自然が行為し生産するところのそれ、それをわれわれが諸原因のうちの一つであると主張しているところのそれ、こうした原因が少しもエイドスと関連させられていない、かえって数学的諸学科が今日の人々では哲学とされている」²⁾

既に見たように哲学はそもそもピュシス *Physis*, すなわち変転極まりない世界の根底にある不変なものの探求に始まった。³⁾

——我々が感覚しているこの世界は行く川の流れるように絶えず生まれては消えてゆくはかない世界である。だが注意深く観察していると、そこには何かしら一定のものがある。流動する現象の奥底に潜む不変なものとは何だろうか。何が真に存在しているのだろうか。

タレスは水、アナクシメネスは空気、エンペドクレスは土、水、空気、火、アナクサゴラスは種子、レウキッポスやデモクリトスは無数の原子を挙げた。つまり彼ら自然哲学者たちは、事物そのものではなく、事物を構成する要素こそ真に存在するものと考えた。

これに対しプラトンは、真に存在するものは天上にあるアイデアだとした。そして我々が現実に見ている様々な事物はアイデアの儂い影のようなものであり、従って真に存在するものではないとした。

だが人間の限られた能力でアイデアを認識できるだろうか。プラトンは、数学や幾何学を通して理性を鍛錬したうえで最後は哲学的問答法により、つまり純粹に思惟のみで、アイデアの認識に至る、と主張した。⁴⁾ この考えでいくと、アイデアの手前に数学的な知識があることになる。するとどうなるか。

——知識とは何であれ存在しているものについての知識である。なぜなら存在していないものは知りようがないから。例えば我々はプラトンの妻について何一つ知ることはできない。なぜならプラトンに妻などいなかったから。すると数学的知識が現に我々にある以上は、数に関する何かが存在していることになるのでは……。

かくしてプラトンは晩年になると、アイデアと事物のあいだに数が実際に存在している、と考えるようになった。

「……プラトンは、さらに感覚的事物とエイドスのほかに、これら両者の中間に、数学の対象たる事物が存在すると主張し、そしてこの数学的諸対象を、一方ではそれらが永遠的であり不変

2013 年 12 月 2 日受付：2014 年 2 月 18 日受理

* 責任著者

住所 〒096-8641 北海道名寄市西 4 条北 8 丁目 1

E-mail : hurumakius@nayoro.ac.jp

不動的である点では感覺的事物と異なるが、他方、数学的諸対象には多くの同類のものがあるのにエイドスはいずれもそれぞれ自らは唯一単独であるという点で、エイドスとは異なるとしている⁵⁾

つまり家を例にすると、様々な現実の家に対し「家」というアイデアはただ一つなのに、数は「数」というアイデアではなく「37」とか「111」といった個々の数がそれぞれアイデアとして存在しているわけである。さながら「数が見える」と言った知恵遅れの双子のように。⁶⁾

こうなると(1)感覺できる事物の世界と(2)感覺できないアイデアの世界とは別に(3)思惟される数の世界があることになる。アイデアだけでもわからないのに、さらに数を措定する意味があるのだろうか。これでは「屋上屋を架す」ならぬ「屋根の下に屋根を架す」ではないか。そこで後継者のスペウシッポスは屋根を一つにした。この感覺の世界とは別に、真に存在しているものとはアイデアではなく数であるとしたのである。⁷⁾

—— 数はそれ自体で存在しているのであり、いかなるもの原因でもない。⁸⁾

—— 様々な数の根源は一そのものである。⁹⁾

つまり、まず一が存在し、その一によって他の数が存在し、それらの数の世界がこの感覺される世界の原型であるとスペウシッポスは考えたようである。

周知のように数を世界の原理として最初に唱えたのは前六世紀後半に南イタリアで一種の宗教結社を築いたピュタゴラスである。彼は自然の中に数が潜んでいる事実に注目した。¹⁰⁾

—— 小石が一つなら点だ。二つあれば線になる。三つにすると面になる。小石が四つになると立体ができる。すると一と二と三と四の合計の十は世界のすべてを網羅していることになる。だから十は完全数である。

—— 琴の二本の弦が同じ長さなら音は同じだ。長さの比が 1:2 なら一オクターブ違う。2:3 なら完全五度、3:4 なら完全四度になる。すると音程の調和にも十が潜んでいることになる。

確かに数は不思議である。我々の日常にも数があるところに潜んでいる。単なる偶然かどうかかわからないが、ひとたびその事実を指摘されれば、恐らく誰もが神秘的な思いにかられるはずである。¹¹⁾

—— 一年は 365 日。この 365 という数字は連続する三つの自然数の平方の和である。すなわち $10^2 + 11^2 + 12^2$ は 365 となる。

—— 365 は続く二つの自然数の平方の和でもある。すなわち $13^2 + 14^2$ もまた 365 となる。

—— 昔は太陰暦の地域が多かった。太陰暦の一カ月は 28 日。28 という数字は、その数自身を除くすべての約数の和と等しい。つまり $1 + 2 + 4 + 7 + 14$ は 28 である。

—— また 28 は最初の二つの奇数の三乗の和でもある。つまり $1^3 + 3^3$ である。

実際にスペウシッポスは『ピュタゴラス派の数について』という論文を記した。擬イアンプリコスによると、同書は前半で線に関する数、多角形に関する数、あらゆる種類の平面と立体に関する数などを論じ、後半では 10 が完全数であり、諸存在の中でもっとも自然で完成力を有すると論じていたらしい。¹²⁾ こうしてみるとスペウシッポスはピュタゴラス派から強く影響されていたことが窺えよう。

しかし、だからといって全面的にピュタゴラス派の思想を取り入れたわけではない。ピュタゴラス派では数はあくまで事物に内在していると考えられていたが、¹³⁾ スペウシッポスは数をこの世界から離れた言わば異次元に存在するものと考えた。すると(1)数を事物から離れた次元に置き、かつ(2)数だけが世界の原理であるとしたところにピュタゴラス派ともプラトンとも違うスペウシッポスの独自性があったと言えよう。

だがアリストテレスにとって数は事物から離れて存在するものではなかった。¹⁴⁾ 彼に言わせれば、プラトン派の人々の欠点は、理屈をこねるばかりで様々な自然の事実を見ていないことだった。

「ところで、広く認められている諸事実を総観する能力が劣っているというのは、経験の不足が原因である。それゆえ自然的なことからの中で暮らしてきた人々はそれ相当に広範囲にわたって関連を持ちうるような原理 *archē* を立てることが可能であるけれども、これに対して多くの抽象的議論に時を費やしたために、これまで現にある事実を観てきていない人々は、僅かな事実に目を向けただけで、いかにもたやすく自己の見解を表明する。かかる点からしても自然科学的に考察する人間と弁証法的に考察する人間との違いがどれほどであるかが分かるであろう」

15)

つまり真に説得力のある理論を示したいなら、もっと自然に目を向けねばならないというわけである。そうした不満があったのだろうか、彼はアカデメイアを去った。

一章 実体

一節 フィジカとメタフィジカ

ではアリストテレスはピュシスすなわちこの世界の根底にある不変なものについて、いかなる見解を懐いていたのだろうか。またいかにしてそのような見解に達したのだろうか。

真っ先に注目すべきは、現存するアリストテレスの著作の中にまさに「ピュシス」の名を負う著作が二つあることである。

一つはギリシア語で *Physikē Akroasis*, ラテン語で *Physica* と呼ばれる八巻の書物で、我が国では『自然学』と訳されている。これは彼がまだアカデメイアに留まっていた頃の著作と推測されている。

もう一つはギリシア語で *Ta Meta Ta physika*, ラテン語で *Metaphysica* と呼ばれるもので、我が国では『形而上学』という名が定着している。こちらは十四巻もあるが、時期的に異なる幾つかの論文や講義録を集めたものであるから成立の由来を簡単に説明しておいた方がよいだろう。

西暦一世紀の末にロードスのアンドロニコスがアリストテレスの遺稿を編集した際、彼は、アリストテレス自身は「第一哲学」*prōtē philosophia* と呼んでいた主題に関する諸巻を『自然学』*physikē* の後 *meta* に置いた。このことから第一哲学群は *Ta Meta Ta physika* (「自然学の後の諸巻」) 縮めて *Metaphysika* と呼ばれるようになった。

だが第一哲学関係の諸論文を自然学の後に置くことはアンドロニコス以前から行われていたようである。というのは前二世紀末と推測される編者不明の目録にはアリストテレスの著書として *meta ta physika* という十巻の書物が報告されているからである。これら十巻とは今日の十四巻から α 巻(今日の第二巻), Δ 巻(第五巻), K 巻(第十一巻), Λ 巻(第十二巻)を除いたものであったと考えられている。もっとも原メタフィジカとも言うべきこれら十巻にしても、一度に書かれたわけではなかったようである。

- (1)まず A 巻(第一巻)がアカデメイアを去ってまもなく書かれた。
 - (2)そのあと B 巻(第三巻), Γ 巻(第四巻), E 巻(第六巻)の三巻が出アテナイ期(前347-前335)に書かれた。
 - (3)やや遅れて Z 巻(第七巻), H 巻(第八巻), Θ 巻(第九巻)の三巻が同じ出アテナイ期に書かれた。
 - (4)さらに遅れて I 巻(第十巻)そして M 巻(第十三巻)と N 巻(第十四巻)が出アテナイ期の終りからリュケイオン期(前355以降)にかけて書かれた。
- 以上の十巻が往時のリュケイオンではメタフィジカと総称され学ばれていたものと思われる。

その後、西暦100年頃、アリストテレスの伝記を書いたアレクサンドリアのプトレマイオス・ケンノスの目録では『十三巻のメタフィジカ』とあるから、この頃までには Δ 巻, K 巻, Λ 巻が加えられていたのだろう。それから最後に恐らくアンドロニコスにより α 巻が第二巻として挿入され、今日の十四巻のメタフィジカが成立したものと考えられている。

- (1) α 巻は既にアカデメイア期に書かれていたようで、内容は自然学も含め理論哲学全般についての序説であるから、なぜアンドロニコスが A 巻と B 巻のあいだに置いたのか理解に苦しむ。
- (2) Δ 巻は『自然学』や『生成消滅論』でも言及されていることから、やはりアカデメイア期に、恐らく他の諸巻に先駆けて書かれたようである。
- (3) K 巻は前半は B 巻, Γ 巻, E 巻の要約であるから、それらより後のものと思われる。
- (4)最後に Λ 巻は第一哲学群とは別の、アカデメイア期の論文で、『自然学』とほぼ同じ頃に書かれたものらしい。人によってはこの Λ 巻を M 巻や N 巻よりも後に位置づけ、第一原理をめぐるアリストテレスの思索の到達点だったとする意見もあるようである。¹⁶⁾

二節 第一哲学

さて、その『自然学』の冒頭でアリストテレスは次のように述べている。

「およそいかなる研究の部門においても……我々がその研究対象を知っていると科学的に認識しているとかいうのは、これらをよく知ってからのことである。というのは普通、我々は各々の対象事物の第一の原因、第一の原理をその構成

要素に至るまで知りつくしたとき初めてその各々を知ったものと思うからである」¹⁷⁾

この言葉から、アリストテレスにとって**学問とは対象を最も根源的次元から認識すること**だったことがわかる。

同じようなことは『形而上学』でも言われている。こちらではまず人間についてこう述べる。

「すべての人間は生まれつき知ることを欲する」¹⁸⁾

人間は本性的に知ることを求める —— まことに名言である。さて、そうした人間がより多くのことを知っているともみなされるのは、物事をその原理とか原因の次元から理解している場合である。そこで**知恵 sophia とは原理や原因を対象とした認識**ということになるわけで、¹⁹⁾またそれゆえ物事の第一の原理や原因を知るとき、我々はその物事について**知者 sophos**と言われるわけである。

では真に知恵と呼ばれるにふさわしい知恵とは何についての第一原因や第一原理を究めることなのだろうか。アリストテレスは**実体ousia**と答える。

「……あの古くから、いまなお、また常に永遠に問い求められており、また常に難問に逢着するところの『存在 on とは何か』という問題は、帰するところ、『実体とは何か』である。……だから我々もまた、このように在るものについて、その何であるかを、最も主として、第一に、否、言わばひたすらこれのみを研究すべきなのである」²⁰⁾

ここで説かれている「実体」なるものが具体的に何を指すのかは次の節で説明する。とにかく真に知恵を愛し、知者たらんとする者は実体について、その原理の何たるかを究めねばならないのであるが、²¹⁾アリストテレスによれば実体には三種類ある。

「……実体には三種類ある。その一つは感覚的な実体で、そのうちの或るものは永遠なものであるが、他の或るものは消滅的なもので、後者はすべての人によって一般に認められているところの実体、たとえば植物や動物なのである……いま一つの実体は、不動な実体であって、これを或る人々は離れて存すると主張している」²²⁾

まずは三種類の実体を整理しよう。

- (1)消滅する感覚的実体
- (2)永遠な感覚的実体
- (3)不動な実体

これらのうち(3)は感覚的なものではなさそうである。しかし「感覚的でないもの」がいかなるものか筆者には見当もつかないし、そもそも、そのような、感覚とは無縁なものが存在することがどうしてわかるのか不思議である。

これに対し(1)と(2)は感覚的なものであるから、おおよそ推測できる。恐らく(1)は我々自身も含めて見たり触れたりできる身近な事物、(2)は天体のことであろう。

さて既に見たように、学問とは対象を最も根源的次元から認識することであり、その究極の対象は実体であり、それは三種類あることから、実体に関する学問にも三種類あることになる。²³⁾

「……先の[両種類の感覚的な]実体は運動を伴っているので自然学の対象であるが、この[不動な]実体は、先の実体と共通するなんらの原理も存しない限り、他の学の対象である」²⁴⁾

(1)と(2)の感覚的実体は運動を伴っているから自然学、しかし(3)の非感覚的な不動の実体は運動しないから別の学問の管轄というわけである。それでは不動の実体を対象とするのはいかなる学問か。

「……自然学は、離れて存するがしかし不動ではないところのものどもを対象とし、数学的諸学のうちの或るものは、不動ではあるがおそらく離れて存しはしないでかえって質料のうちに存するところのものどもを対象とする。しかるに第一の学は離れて独立に存するとともに不動であるところのものどもを対象とする。……かくして三つの理論的な哲学があることになる。すなわち自然学と数学と神学である」²⁵⁾

これによると(3)の非感覚的な不動な実体にも「離れて存しないで質料のうちに存する不動の実体」と「離れて存する不動の実体」があるようである。

自然学は「離れて存する」実体を対象とし、それは具体的には地上の様々な事物や天体と思われるから、ここで「離れて存する」と言われていることの意味は「個々の独立したものとしてあること」つまり個物と推測できよう。

仮にその通りなら、第六感のような超常能力を具えている人物でもない限り、数が事物から離れ個物として存在しているとはどういえないから、「離れて存しないで質料のうちに存する不動の実体」とは個々の実体に内在している数のことであり、それを対象とするのが数学 *mathēmatikē* であろう。

すると同じ不動でも「離れて独立に存する」つまり**個物としてある非感覚的な不動の実体**を対象とするのが第一の学ということになろう。この学問について彼は次のように述べている。

「もし自然によって結合された実体以外にはいかなる実体も存在しないとすれば、なるほど自然学が第一の学であるだろう。しかし、もし何か或る不動の実体が存在するなら、これを対象とする学の方がいっそう先であり、第一の哲学であり、そしてこのように第一であるという意味でこの学は普遍的でもあろう。そして存在 on をただ存在として研究すること、存在の何であるかを研究し、また存在に存在として属するその諸属性をも研究すること、これこそはまさにこの哲学のなすべきことである」²⁶⁾

筆者に言わせれば、非感覚的な不動の個物を対象とした学問がどうして第一の哲学になるのか分からないし、そもそも非感覚的で不動な個物がいかなるものなのか、またそうしたものが存在するといかにして分かるのか全く理解できないのだが、とにかくここまで判明したことを整理すると以下のようなろう。

- (一) 学問とは対象を最も根源的次元から認識することである。
- (二) 対象の中でも最も究極的な対象とは実体であり、それは三種類ある。
- (三) それら実体を対象とする学問が理論学であり、自然学、数学、神学がある。
- (四) 感覚的で運動する実体を対象とするのが自然学である。
- (五) 運動しないし個物でもない数を対象とするのが数学である。
- (六) 個物としてある不動な非感覚的な実体を対象とするのが神学であり、これこそが第一哲学である。

三節 個物とその形相

では「実体」についてアリストテレスがどう考えていたのかを見ていこう。彼はしばしばこう繰り返している。

「存在 on は多様に語られる」²⁷⁾

現在ある形で伝えられている『形而上学』の中で最古層を形成するΔ巻(第五巻)では「在る」には四通りの意味があると言われている。²⁸⁾

- (1)付帯的な在り方
- (2)自体的な在り方
- (3)真とか偽としての在り方
- (4)可能性と現実性における在り方

簡単に説明すると、まず(1)は「ソクラテスは賢い」とか「プラトンは太っている」と言うとき、「賢い」とか「太っている」はあくまで「ソクラテス」や「プラトン」の存在を前提にしているように、何らかの事物に対する述語としてあるような在り方をいう。

(2)は逆に、(1)によって形容される側つまり述語に対する主語の側である。確かに「ソクラテス」や「プラトン」は、「賢い」とか「太っている」という述語がなくても、「ソクラテスがいる」、「プラトンがいる」と言えるように、それ自体として存在可能である。

(3)は「ソクラテスは賢い」と言うとき、これは「賢く在る」ということであって、命題の肯定を意味している。また「プラトンは痩せていない」は「痩せては在らぬ」であり、これは命題が偽であることを意味している。

(4)については次節で説明する。

さて、このΔ巻でアリストテレスは実体についてこう述べている。

「実体と言われるのは、単純物体、例えば土や火や水やその他このような物体、また一般に物体やこれら諸物体から構成されたものども、すなわち生物や神的なものども、およびこれら各々の諸部分のことである。これらはすべて実体と言われるが、そのわけは、これらが他のいかなる主語の述語でもなくてかえって他の物事がこれらの述語であるところのものどもだからである」²⁹⁾

確かに「水は冷たい」とか「鉄は重い」とか「火星は赤い」などの「水」、「鉄」、「火星」は主語であって述語ではない。これらはいずれも個々の物体であって、先ほどの四つの分類で言えば(2)の自体的な在り方をしている。すると、どうやら**実体とは個物として在るもの**と言えそうである。

だがΔ巻の続く箇所を読んでみると、他の実体に内在していて、その実体をそれたらしめている原因も実体とされている。³⁰⁾

- 生物を無生物ではなく生物たらしめているのは靈魂が内在しているからである。ゆえに靈魂もまた実体と言われる。
- 物体は面からできている。面がなくなれば物体はなくなる。同様に面は線からできている。線がなくなれば面はなくなる。ゆえに面とか線も実体と呼ばれる。
- 事物をそれたらしめているというなら、事物の「何であるか」もそうだ。ゆえに「何であるか」もまた実体である。

ある事物の「何であるか」 *to ti ên einai* とはその本質であり、通常はそれが属する種を指す。例えば四本の長い足を持った動物について「何であるか」と問われれば、「馬」とか「鹿」とか答えるように。それゆえギリシア語では事物の本質と種は同じ「エイδος」 *eidos* の一語で現わされる。そして注意すべきは、我が国のアリストテレス研究においては、この「エイδος」は伝統的に「形相」と訳されることである。だから「形相」と出てきたら、それは同時に事物の本質であり種であることを理解しなければならない。

かくして実体には二通りあることになる。

「……要するに実体というのには二つの意味があることになる。すなわち(1)その一つはもはや他のいかなる基体の述語ともなりえない窮極の基体であり、(2)他の一つはこれと指し示される存在でありかつ離れて存しうるものである。すなわち各々のもののかたち *morphē* または形相 *eidos* がこのようなものである」³¹⁾

この引用の(1)は既に見た自体的存在であり、それは個物であった。それに対し(2)では、その**個物の形相も実体**と言うわけである。

個物とその形相 —— どちらがより実体であろうか。アリストテレスは言う。

「存在するということにも多くの意味があるが、そのうちでも第一には基体がより先であり、したがって実体がより先である」³²⁾

以上から Δ 卷では、個物すなわち自体的在り方こそ第一義的な実体とされていたことがわかる。そしてこのことは、かなり初期の著作と推定される『カテゴリー論』からも言える。

「実体とは、その勝義の第一のまた最も主として用いられる意味では、いかなる基体の述語ともならず、またいかなる基体のうちにも存属しないものことである。たとえば、この人とかこ

の馬とかである。しかし第二義的には、これら第一義的に実体と言われるこれらをそのうちに含むところの種 *eidos*、およびこれらの種を含むところの類 *genos* もまた実体と言われる。例えば、この人やあの人は人間という種のうちに含まれ、そしてこの種を含むところの類は動物であるが、この場合、これら種としての人間や類としての動物は第二義的に実体と言われる」³³⁾

ここでも第一義の実体は「この人」とか「この馬」つまり個物であり、「人」とか「動物」といった種、つまり形相は第二義的な実体と明言されている。

次に Δ 卷よりやや遅れて、出アテナイ期に書かれたと推測される E 卷(第六卷)を見てみよう。ここでも存在はやはり四つに分類されている。

「……この端的に言われる存在にも多くの意味があるので —— すなわち、その一つは(1)付帯的な意味での存在であり、他の一つは(2)真としての存在と偽としての非存在であったが、これらのほかになお(3)述語としての諸形態、たとえば、『何であるか』、『どのようにあるか』、『どれほどあるか』、『どこにあるか』、『いつあるか』その他このような述語の諸形態があり、さらにこれらすべてとならんで(4)可能的な存在と現実的な存在がある」³⁴⁾

これら四つのうち(1)の「付帯の意味での存在」は単に名前としてあるだけだから、³⁵⁾また(2)の「真とか偽としての存在」については、真とか偽は判断の問題であり事物そのものに在るわけではないから、³⁶⁾どちらも第一哲学の対象たりえないとされる。

すると残るは(3)の「述語の諸形態としての在り方」と(4)の「可能的・現実的な在り方」であり、前者は Z 卷(第七卷)、後者は Θ 卷(第九卷)でそれぞれ考察されている。そこでさっそく Z 卷を見てみよう。その冒頭ではこう言われている。

「在るというのには多くの意味がある……すなわち、それは(1)或る意味では、ものの『何であるか』を、またこれなる個物を指し、(2)他の意味ではそのものの『どのようにあるか』を、あるいは『どれほどあるか』を、あるいはその他のそのように述語される物事のそれぞれを意味する。……これら諸義の存在のうち、第一義的存在は、言うまでもなく明らかに、ものの『何であるか』を示すそれであり、これこそは実体を指し示すものである」³⁷⁾

この引用の前半の(2)は事物の性質とか量を示すものであるから、Δ巻で言うところの付帯的在り方であろう。これについては既に除外された。

すると残る(1)こそ実体であろう。つまり「ものの何であるか」であり「これなる個物」である。先にも述べたが「何であるか」とは本質であり、それは普通は種 *eidos* を指すから、これは先ほど Δ巻において、個物とその形相 *eidos* のいずれも実体とされていたことと一致していると言えよう。

だが気がかりなのは、引用の後半で「何であるか」つまり個物ではなく形相の方こそ第一義的存在であり実体であると述べていることである。これについて明確な説明は見当たらない。本当は個物と書くべきところを「何であるか」とうっかり書いてしまったのだろうか。そこで続きを読んでいくと、三章で有名な言葉が登場する。

「……実体というのは他のいかなる基体の述語でもなくて、それ自らが他の述語の主語であるところのそれであった」³⁸⁾

主語になって述語にならないもの —— これは Δ巻との繋がりであれば自体的在り方をしているものであるから、やはり「実体とは個物」と言いたいのだろう。以上から**実体とは第一義的には個物、第二義的には個物の形相**と理解してよいだろう。

四節 可能態と現実態

様々な「在る」のうち、第一義的在り方は実体としての在り方であり、それは第一義的には個物、第二義的にはその個物の形相であることがわかった。しかし、そうなると当然の疑問が生じる。

——なぜ実体について、個物とその形相というように二義を設ける必要があるのか。

すると意味を持つと思われるのが、アリストテレスが Δ巻で挙げた四通りの在り方の四番目である。すなわち可能性と現実性における在り方である。これについて Θ巻は説明している。

「……いままで述べてきたのは第一義的に在るもの *on*……についてであった。すなわち実体についてであった。……だが、在るもの *on* は、一方ではこのように『何である』とか『どのようにある』とか『どれほどある』とか言われるが、他方では可能態と完全現実態との側、すなわち働きの側からも区別して言われるから、我々はまた、この可能態と完全現実態とについても、これらを規定しておかねばならない」³⁹⁾

まず可能態 *dynamis* とは一般に、事物の生成消滅や質の変化、量の増減、移動などの原理である。⁴⁰⁾例えば木材は加工すれば机や椅子になることが可能である。粘土は壺や皿になることができる。言うなれば木材は机に、粘土は壺になる力を秘めているから、そうした可能性の状態を「力」とか「能力」を意味するギリシア語のデュナミスを用いて「木材は力的に机である」とか「粘土は力的に壺である」と言う。

つまり木材は机に対し、粘土は壺に対しそれぞれ可能態にあるわけであり、それらに働きが為されることで現実的に机や壺になるわけである。そこで、こうした現実化が完成した状態は「働き」*ergon* とか「活動する」*energein* にちなんで現実態 *energeia* と呼ばれるわけであるが、中でも可能態が完全に現実化されて最終的に完成された状態は特に完全現実態と呼ばれる。例えばイモムシはさなぎを経て蝶になるわけであるが、さなぎの段階ではまだ可能的に蝶でしかない。さなぎから羽化して蝶になれば、それ以上の完成はもはやないから「終り」*telos* の「内」*en* に「ある」*echein*、だから完全現実態 *entelecheia* というわけである。

さて、このような「可能態と現実態」という見方をすると、世界に見られる様々な現象は必然的に「可能態から現実態への変化」として発展的に理解されることになるだろう。つまり「およそ生成するものは、すべて、或る原理に向かって、すなわちその終りに向かって進行する」⁴¹⁾のであり、「何かの現実態は、その何かの終り」⁴²⁾であるという目的論的世界観が前面に出てくるわけである。

「在る」について可能態と現実態という見方が可能となれば、同じことが実体についても言えるのではないだろうか。そして仮にそうだとすれば、個物とその形相がいずれも実体とされていることは、実体が可能態から現実態へと力動的に理解されていることの反映ではないだろうか。そこで我々は実体について、そこに力動性が認められるか否か確認しよう。真っ先に対象になるのは感覚的な事物である。というのは『自然学』第一巻の初めの方でアリストテレスはこう述べているからである。

「……そのための道は、我々にとってより多く可知的でより多く明晰であるものから出発して、自然においてより多く明晰でより多く可知的であるものへ進むのが自然的である。けだし同じ

ものごとが我々にとっても端的にひとしく可知
的であるわけではないからである」⁴³⁾

すなわち対象を第一原理の次元から認識することが学問の目的であるが、我々は第一原理を直接的に認識することはできないから、まずは認識可能なところから、つまり自然の事物から始めていくしかないというわけである。まことにその通りである。

二章 自然

一節 転化

アリストテレスによれば**自然の事物とは運動も含め変化する能力を自らのうちに有するものである**。⁴⁴⁾だから生成消滅する地上の事物だけでなく、天空を運行する天体たちも自然の事物とされる。そして、これら自然の事物に内在する、そうした**変化の原理こそピュシス physis** と呼ばれる。⁴⁵⁾

自然物とは運動も含めて変化するものであり、その原理がピュシスとなると、ピュシスの探求とは実に変化についての探求ということになる。

「ところでピュシスは運動の原理であり、また[一般に]転化の原理であり、そして我々の研究はこのピュシスについてであるから、それゆえに我々は運動の何であるかの考察も忘れてはならない。というのは、これが認識されなくては必然的にピュシスも認識されないからである」⁴⁶⁾

ここで**転化 metabolē** という概念が登場する。まずはこれから解明していこう。アリストテレスによれば「**転化はすべて或るものから或るものへ**」⁴⁷⁾の転化であるから、以下の三通りが考えられる。⁴⁸⁾

- (1) 基体から基体への転化
- (2) 基体から基体でないものへの転化
- (3) 基体でないものから基体への転化

これだけでは漠然としていてわからない。そこで転化の実例を考えることにしよう。手掛かりになるのは次の言葉である。

「……転化するものが転化するのには常に、実体においてか、量においてか、性質においてか、場所においてかであり……」⁴⁹⁾

すなわち転化は(1)実体、(2)量、(3)性質、(4)場所の四通りというのである。それぞれ例を挙げよう。

- (1) 子供が生まれた。
- (2) 妻は痩せていたが太った。
- (3) 酒が酸っぱくなった。
- (4) サルが木から落ちた。

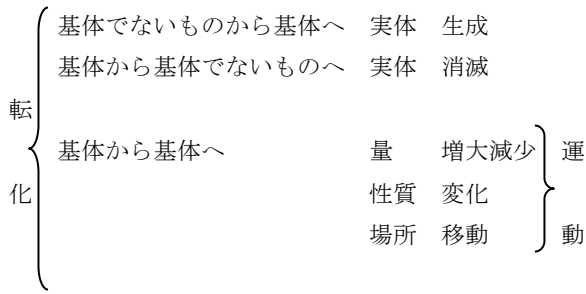
これらは順に生成 *genesis*、増大 *auksēsis*、変化 *alloiōsis*、移動 *phora* と呼ばれる。これらに共通することは何だろうか。先ほど我々はアリストテレスが「転化はすべて或るものから或るものへの転化である」と述べていることを見たが、もう少し詳しく言うとなぜ**すべての転化は反対から反対への転化**なのである。⁵⁰⁾いま挙げた四つの例で言えば「子供が生まれた」というのは無から有への、「妻は痩せていたが太った」は小から大への、「酒が酸っぱくなった」は甘から酸への、「サルが木から落ちた」は上から下へのそれぞれ転化である。

だが、よく考えてみると「子供が生まれた」だけは異なる。後の三つにおいては、それぞれ妻、酒、サルという「或るもの」が既に存在していて、それらが反対から反対へと転化するのに対し、生成においては「或るもの」がまだない状態からの転化だからである。そこで言われる。

「……運動はすべて転化の一種であり、そして転化には上述の三つの場合があって、これらのうち生成と消滅の意味での転化は運動ではなく、これら両者は矛盾的に対立するものどもへの転化であるからして、基体から基体への転化のみが運動でなければならない」⁵¹⁾

つまり「基体から基体へ」、「基体から基体でないものへ」、「基体でないものから基体へ」の三通りの転化があるうち、特に「基体から基体へ」だけをアリストテレスは**運動 kinēsis** と呼ぶ。だから運動とは終始「或るもの」が存在し続けるような転化であり、そうした「或るもの」の量における運動が増大と減少 *phthisis*、性質における運動が変化、位置における運動が移動と呼ばれるわけである。

これに対し「基体から基体でないものへ」の転化は「或るもの」が無くなってしまふ消滅 *phthora* であり、「基体でないものから基体へ」の転化は「或るもの」がまだ無い状態からの生成であり、どちらも「或るもの」が常にあるわけではないから運動とは呼べないとアリストテレスは考える。



我々の感覚からすれば量の増減や質的变化が運動とはどうてい思えないのだが、アリストテレスのように基体として「或るもの」が常在するか否かを基準とすれば、確かにこのように分類することも可能であろう。

- 量の増大においては「或るもの」とは「妻」であり、それは一貫して在り続けている。なぜなら妻は太っても妻であるから。
- 性質の変化においては「或るもの」とは「酒」であり、それは一貫して在り続けている。なぜなら酒は酔っぱくなくても一応は酒であろうから。
- 場所の移動においては「或るもの」とは「サル」であり、それは一貫して在り続けている。なぜならサルは木から落ちててもサルであるから。

では、この図式を実体の生成に当てはめたらどうなるだろうか。

- 子供の生成においては「或るもの」とは「子供」である。しかし生まれてくる前には「子供」は存在していなかった。つまり「或るもの」はなかった。すると子供は無から生じてきたのだろうか。
- でも無から何かが生じるだろうか。無いものは無いのだから、なに一つ生じないはずだ。このことはまさにパルメニデスが言っていたことである。
- すると「或るもの」としての「子供」が生成する以前に何か「子供ではないもの」があったと考えるしかない。それは無ではないが、具体的に名前をつけられない、ほとんど無に近い何かである。
- この、無ではないがほとんど無に近い何か「子供」として現実化することが実体の生成ではないだろうか。

すると俄然、生きてくるのが先に見た可能態と現実態という捉え方である。アリストテレスは言う。

「存在の諸種類の各々には、それぞれ完全現実態なものとの区別があるが、可能態なものとしての限りにおける可能態のものとの現実態(現実活動)が運動である。例えば変化可能態のものとしての限りにおける変化可能態のものとのそれが変化であり、増大可能態のもの及び減少可能態のものとのそれは増大および減少であり、生成可能態のものおよび消滅可能態のものとのそれはそれぞれ生成および消滅であり、移動しうるものとのそれは移動である」⁵²⁾

この引用にある運動とは、生成消滅が含まれている以上、正確には転化のことであろう。すると増大減少・変化・移動といった運動も含めて**一切の転化は可能態から現実態への移行**として説明可能となる。先ほど我々はピュシスが変化の原理であることを見たが、それは、より詳しく言えば、**可能態から現実態への転化**の原理だったわけである。

そうなる先ほどの子供の生成で登場した「無ではないがほとんど無に近い何か」とは「現実態が生成する以前に可能態においてあるところのもの」ということになろうし、運動も可能態から現実態への移行である以上、そこにも「無ではないがほとんど無に近い何か」が隠れているはずであろう。それが質料 *hylē* である。

二節 質料と形相

既に見たように、すべての転化は反対から反対への転化であった。その根底にあるものについてアリストテレスはこう述べている。

「……(1)反対のものども(熱さと寒さ、その他このような自然的な反対対立)には一つの質料があるということ、また(2)可能的な存在から現実的な存在が生成するという、また(3)ものの質料はそれぞれの持つ反対のものどもから離れて存するものではないが、そのもののあり方[本質・形相]はそれらのものどもとは異なっているということ、そしてまた(4)質料は数においては一つであっても、場合に応じて、色の質料でもありまた熱さのでも寒さのでもありうるということ……」⁵³⁾

質料は種類としては一つしかなく、それ自体としては固有の名前を持たない。つまり「酒」とか「サル」なら「どこの酒」とか「何から作った酒」、「ど

んな種類のサル」とか「どこの動物園のサル」とか答えることができるが、質料はただ質料としか言いようがないものである。⁵⁴⁾その意味で無ではないもののほとんど無である。しかしだからこそ、つまりそれ自体としては何ものでもないからこそ、何ものにもなりうるわけであり、そうした可能性を秘めた何かをアリストテレスは便宜上、質料と呼んでいるわけである。

質料が何ものにもなりうるということは「あらゆるものに対して可能態である」ということであり、また事物もこうした質料を有しているからこそ反対のものに転化できるわけである。逆に言えば、いかなる転化もしないものには質料がないわけである。

「すべての事物に質料があるのではなく、ただ生成や他への転化がある事物にのみ質料がある。

だが転化なしにあるものや転化しないものには質料はない」⁵⁵⁾

しかし注意すべきは質料が自ら転化するわけではないということである。質料はあくまで受動的なものでしかない。

「質料の持つ特性は『作用を受ける』とか『動かされる』ということであって、『動かす』とか『作用する』というのは違った能力に属している」⁵⁶⁾

では質料に働きかける能力は何が持つのか。アリストテレスは言う。

「……動かされうるものは可能的に動かされるものなのであって、現実的に動かされるものではない。だが可能的なものは現実性へとすすむのであり、運動は動かされうるものの不完全な現実性である。他方、動かすものはすでに現実性においてある。たとえば熱いものが熱くするのであり、一般に形相を所有するものが形相を生むのである」⁵⁷⁾

質料は何にでもなりうる力を持つが、実際にそれを或る何かへと現実化させるのは**形相 eidos** である。そして、この形相から働きかけを受けた質料がその形相を現実化していく過程こそ運動(正確に言えば転化)なのである。

すると当の質料とは別に、形相を既に所有している現実態が存在していなければならない。ちょうど冷たい水を熱くするためには、電熱器とかガス焔炉といった既に熱の形相を持っているものが存在しなければならないように。

生成にしても同じである。可能的に人間でしかない質料に、何か人間の形相を有するものが働きかけ

るからこそ、まだ「人間」ではなかった質料は「人間」へと現実化されるわけである。すると質料はあくまで転化の可能性であり、転化の真の原因は形相ということになるろう。

「……動かすものは常に或るなんらかの形相(それはこれなる実体であることもあろうし、性質であることもあろうし、あるいは量であることもあろうが)を含み運んでいて、この動かすものが動くとき、その含む形相がその動きの原理となり、原因となるであろう、たとえば完全現実態にある人間が可能態においてあるところの人間から人間をつくるように」⁵⁸⁾

以上から、**転化とは可能態である質料が形相を獲得して現実態になること**、そうした**転化の可能性が質料で、転化の原因が形相**であることがわかった。すると先ほど一章四節で筆者が示した「なぜ実体について、個物とその形相というように二義を設ける必要があるのか」という疑問については、まずこう答えることができよう。

—— 我々の素朴な感覚では確固としてあるように思われる個物も、アリストテレスに言わせれば可能態から現実態への流動性の中にある。だから個物を実体と言っても、それはあくまで形相を実現し保持している限りでの話であり、形相抜きでは何も語り得ない。するとこの意味では、個物が実現する形相の方こそ、その個物が実体と言われる鍵ということになるろう。してみると個物だけを実体とするわけにはいかない。

さらに、一つの個物において「可能態から現実態への形相の実現」があるように、個物と個物のあいだにも同じような関係が見られる。

—— 可能態から現実態へのあらゆる転化の中で個物は絶えず形相を求めている。そして転化は、既に形相を持つことで現実態にある実体により引き起こされるわけだから、あらゆる実体はその転化の原因を自らの外に持つ。

そこで次節では転化する実体たちにおける力動的関係を見てみよう。

三節 四元素と第五元素

まずは(1)の消滅する感覚的実体と(2)の永遠な感覚的実体の関係である。

自然の事物、つまり生成消滅したり増大減少したり変化したり移動したりする様々な事物は確かにど

れも転化しているが、事物によって転化の種類に違いがある。

「……すべてのものは常に運動しているのでもなく、あるいはまた、常に静止しているのでもなく、また或るものどもは常に運動しており他のものどもは常に静止しているのでもなく、若干のものどもは或るときには運動しており他のときには運動していないのはなぜか……」⁵⁹⁾

自然の事物は無生物から天体に至るまで様々である。それらのうち(1)天体は場所の移動をしているだけだが、(2)地上の事物はすべて生成消滅する。同じ自然の事物なのに、この違いはどこから来るのだろうか。その理由をアリストテレスは質料に求める。『形而上学』ではこうある。

「……すべてのものは、転化するものであるかぎり、或る質料を持っている。ただし[転化の仕方の異なるに応じて]それぞれ異なる質料を。例えば永続的なものどものうちでも、生成はしないが移動としての運動をするものどもは、生成のための質料をではないが、しかし、どこからどこへのそれ[場所的転化の質料]を持っている」⁶⁰⁾

ここで言われている「永続的なもので生成はしないが移動するもの」とは天体のことであろう。同じ自然の事物であっても、(1)生成する地上の事物と(2)生成しない天体とでは質料が違っているとアリストテレスは言うわけである。どう違うのだろうか。

(その一)まず地上の事物においては質料から土・水・空気・火の四元素が生じる。これらのうち火と空気は本来的に上方に場を占め、土と水は下方に本来の場を持つ。もう少し詳しく言えば火は宇宙の周縁に、土は中心に存在する。だから火は本性的に上へと強く昇るが、空気は弱く昇る。土は下へと強く降るが、水は弱く降る。⁶¹⁾つまり四元素自体が大別すれば上と下への反対の運動をするようにできているわけである。するとどうなるか。『天体論』の論理を敷衍しよう。⁶²⁾

—— いま仮に石を上空へと投げたとしよう。これは本性的に土である石からしてみれば自分本来の場とは反対の方向へと動かされることから、上昇する速度は次第に鈍り、やがて静止に達するや落下を始める。

—— ところが下へと向かうのは石にとって自然なことであるから、石本来の場所である地上に近づくほど速度は増す。

—— だが速度が無限になったら、重量も無限ということになろう。しかし無限に大きな石など存在しない。ということは速度には限界があることになろう。

—— 速度が有限ということからすると、直線運動もまた有限であろう。すると直線運動は永遠の運動ではない。⁶³⁾

直線運動が永遠でないとなると、そうした直線運動をする四つの元素から成るものとはとうてい永続し得ない。だから地上の事物は生成しても儻く消滅してしまうのである。⁶⁴⁾

(その二)地上の事物が本質的に直線運動の組み合わせで動くのに対し、天体はどれも円運動をする。

—— 円運動は、直線運動のように反対から反対へ、一方の端から他方の端への転化ではないから、両極で一旦停止するようなことはない。つまり連続的であり、従って永遠である。⁶⁵⁾

—— しかし地上の事物を構成する四元素はどれも直線運動しかしない。すると天体は四元素とは別のものできているのだろう。

かくしてアリストテレスが想定するのが第五の元素すなわちアイテール *aithēr* である。

「運動のうち円運動は自己完結した動きであるから、直線運動より優れており、直線運動ですら単純物体に属するから——例えば火が直線的に上に上がり、土は下へと中心に向かって移動するように——円運動も必然的に単純物体に属さなくてはならない。……そこから明らかになることは、この地上における四種の形成物のほかに何か別の或る物體的な実体が自然に存在しており、そしてそれはこれら地上のあらゆるものより神的でかつより先なるものである、ということである」⁶⁶⁾

永遠に運動をするアイテールだけで出来ている以上、天体には円運動以外に転化はありえない。つまり天体は不生不滅であり量の増減も質の変化もない永遠の実体なのである。

「この円運動をする物体について、これが不生・不滅・不増・不変であると考えるのは当然である。なぜなら自然学研究の最初のところで説いたように、およそ生成するものはすべて或る基体において相互に反対のものから生成するのであり、同様にまた消滅するものも、或る基体において反対のものにより反対のものへと消滅す

るのであるから。ところで反対のものの運動も相互に反対のものである。およそ円運動に対しては、これに反対する何らの運動もないであろうから、それゆえ、この円運動をする物体にもこれに反対する何らの運動も存し得ない。従って自然が、不生不滅たらんとするこの物体をその反対のものどもから放免したことは、まことに当然と思われる。というのは生成消滅は反対なものどもにおいて起こることだからである」⁶⁷⁾

以上から、(1)地上は四元素の世界であり、そこにある事物はいずれも反対のものどもの合成体であるから、生成消滅し運動もするが、(2)天上の事物はアイテールだけで出来ているから分解しようがなく、ただ永遠に円運動だけすることが説明された。地上の実体と天上の実体の違いとは偏に素材の違いであり、それがそのまま転化の違いなのである。

四節 不動の動者

かくして(1)地上の生成消滅する感覚的実体と(2)天上の永遠な感覚的実体との違いは分かった。

では、これら二種類の実体から、どうして(3)の不動な非感覚的実体が想定されるのだろうか。これまで見てきた思索を続けていけば恐らくこうなる。

—— 天体はアイテールで構成されているから生成も消滅もしない。永遠である。⁶⁸⁾

—— 永遠である以上、その運動も永遠でなければならない。だからこそ天体は連続した運動である円運動をしている。⁶⁹⁾

—— だが永遠なものがそもそも運動などするだろうか。永遠なら不動の方がふさわしくないだろうか。なぜ天体は動くのだろうか。

なぜ天体は動くのか —— これについて思い起こすべきは、転化とは「可能態から現実態へ」の転化ということである。可能態にある質料が形相を現実化することで生成や増大や変化は起きるわけである。運動もまた同じように説明される。

「運動とは運動可能なものとしてのかぎりにおける運動可能なものの現実化である……従っていずれの種類の運動においてもそこに運動可能な事物がなければならない」⁷⁰⁾

だが、すべての運動可能な事物は、何かによって動かされている。

「動くものはすべて何かによって動かされるのでなければならない」⁷¹⁾

つまり運動の現実態にあるものが、可能的に動かされるものを実際の運動へと現実化するわけである。当然これも、また別の現実態にあるものによって動かされているはずであろう。

「或る一つの現実態には常に或る他の現実態が時間的に先立っている……」⁷²⁾

だがこの系列を無限に続けることはできない。

—— いま仮に無限だとすると、第一番目のものが存在しないことになる。だが一番目がないなら、二番目、三番目といった後に続くものどもも存在しないことになろう。するとこの世には何ら転化など起き得ないことになる。⁷³⁾

すると天体たちに先だって何か第一のものが在らねばならないだろう。

「動くものはすべて何かによって動かされなければならないがゆえに、もし或るものが他の動くものによって場所的に動かされ、さらにその動かすものが他の動くものによって動かされ、さらに、そのものが異なるものによって動かされ、このように系列がどこまでも続くとすれば、何か第一の動かすものがなければならず、系列は無限へと進行してはならないのである」⁷⁴⁾

この第一のものは第一にあるがゆえに、他のものによって可能態から現実態へ動かされるようなものではない。始めから現実態にあるのである。始めから現実態であるから、いかなる質料も含んでいない純粋な形相であり、質料が全くない以上、いかなる転化もない。従って永遠不変である。⁷⁵⁾

さらに天体はアリストテレスによれば生物とされる以上、⁷⁶⁾永遠不変のこの第一のものはそれ以上に生命のはずである。つまり最高の生命なのである。

「……天の外のかしこに存在するものどもは場所的に存在すべき本性を持ちもしないし、また時間がそれらを老いさせることもないし、また最外の運動を越えて位置を占めているものにはなんらの転化も属さない、それどころかむしろ、それらは不変にして無苦であり最も高貴にして最も自足的な生命を持ち、永劫にわたり終始存続しているのである」⁷⁷⁾

永遠にして最高の生命ということから、この第一のものは神と考えられよう。さらに最高の生命であるからには、この第一のものは純粋な思惟 *noēsis* と考えられる。そして第一のものである以上、それが思惟する対象は当然、第一のものと考えられる。つ

まり自分自身であり、自分以外には全く無関心であろう。

「……それは最も神的で、最も尊いものを思惟しており、それは転化しないものである……それゆえにそれ自らを思惟する(いやしくも最も優越的なものであるからには)、言い換えれば、その思惟は思惟の思惟である」⁷⁸⁾

最高のものが最高のものを思惟しているのだから、この第一のものは最高に幸福である。⁷⁹⁾余りの幸福ぶりに恒星たちは彼をうらやむ。そして羨望の余り動きだす。

「……或るものがあって、これは常に動かされつつ休みなき運動をしている。そしてこの運動は円運動である。……従って、この第一の天界は永遠的なものであろう。だが、それゆえに、さらにこの第一の天界を動かすところの或るものがある。動かされかつ動かすものは中間位にあるものであるから、動かされないで動かすところの或るものがあり、これは永遠的なものであり、実体であり、現実態である。それは、あたかも欲求されるものや思惟的なものが、動かすような仕方であらう」⁸⁰⁾

すなわち他のものを動かしながら自らは動かない**不動の動者** to kinoun akinēton という有名な概念である。⁸¹⁾この不動の第一の動者への羨望により恒星たちが引き起こす円運動から、それより下の世界に様々な転化が生じることになる。

- 第一の動者は何ら転化しないから、それがもたらす運動は単一である。すなわち恒星たちに単一の円運動を引き起こす。⁸²⁾
- 恒星たちの円運動により、それより下位の惑星たちも円運動することになるが、惑星たちの場合は地上の諸事物と様々に関係しているため不規則な円運動をする。⁸³⁾
- 天上界全体は太陽の軌道に対して傾斜して移動するため、その影響で太陽は地球に近づいたり遠のいたりする。太陽が接近すると、地上では生成が活発になり、遠ざかれば消滅が活発になる。だから生成消滅の直接の原因は天上界に対する黄道のずれにある。⁸⁴⁾

以上により自然界の転化が様々である理由が明らかになった。つまり或るものは何一つ転化しない不動の動者によって動かされているから単調な規則的運動をするだけだが、別のものは転化するものに動

かされているから転化したりしなかったりと不規則なのである。

だが、すべての転化は「可能態から現実態へ」の転化であるから、全体として見れば、不動の動者という純粹形相へ向けて宇宙全体が転化を繰り返している壮大な構図が見えてこよう。

すなわち地上の生成消滅については惑星の不規則な円運動が、惑星の不規則な円運動については恒星の様な円運動が、恒星の様な円運動については不動の動者が、それぞれ原因である。すると不動の動者とはいわば宇宙全体の原動力であり第一原因と言えよう。ただし、それは感覚されるものではないから、天の彼方に想定するしかない。これにはアリストテレス自身も恐らく当惑したことであろう。

—— どういうものか分からないが、純粹形相が恒星天の彼方に存在するはずである。それが世界のすべての転化のピュシスなのだ。

かくしてアリストテレスのピュシス探求は**自然学 physica** では収まらず、**必然的に超 meta 自然学** になってしまうわけである。すると彼が言う第一哲学を、後世の人々がメタフィジカ metaphysica と呼んだのはこの点からも実に適確だったと言えよう。

三章 人間

一節 理性

だが、それでも当然の疑問が出よう。

—— 理屈ではそうなるかもしれないが、人間の能力には限界がある。だから我々としては地上の実体と天上の実体を探求した自然学だけで満足するべきではないだろうか。

確かにその通りである。だがそうと分かっているが、我々は本性的にどうしてもメタフィジカへと向かわざるを得ないのである。

我々の本性 —— それは既に見たように「生まれつき知ることを欲する」ということであつた。

なぜそうなのか。

それは人間の中に何か特別な能力が秘められているからである。『動物部分論』ではこうある。

「その自然がただ単に生きるというだけではなく、よく生きるにあるような動物では[身体の各部分は]特に多種多様である。ところでこのようなのが人間である。けだし我々の知っている限りのすべての動物のうち、人間だけが神的なものに与っている。とって悪ければ、少なくともす

すべての動物の中で最も高度に与っているからである。……自然的な部分があるまま自然的な位置をとっているのは人類だけであり、ヒトの上体は宇宙の上部を向いている。すなわち動物たちの中でヒトだけが直立している」⁸⁵⁾

つまり、人間の中には神的なものがあるから、本性的に宇宙を向くように出来ているのであり、またそうすることこそ人間として「よく生きる」ことなのだ、とアリストテレスは言いたいわけである。

神的なもの —— いったい我々は他の動物とどう違うのだろうか。

まず生物とは自らの力で栄養摂取や成長など生命活動をするものであり、⁸⁶⁾そうした**生命活動の原理が**靈魂** psychē と呼ばれるものである。**

「……靈魂は生命を持つ身体の原因にして原理である」⁸⁷⁾

存在の在り方が多様であるように生命の在り方も多様であることをアリストテレスは認める。

「……有魂のものは無魂のものから『生きていること』によって区別されると言う。しかし『生きていること』は多くの意味で言われるから、たといそれらの意味にあたるものが、もののうちに何かただ一つあるだけでも、そのものは『生きている』と言う、そしてそれらの意味にあたるものというのは、例えば理性、感覚、場所による運動と静止、さらに栄養にもとづく運動、すなわち衰弱と成長などである。それゆえに植物もまたそのすべてが『生きている』と思われているのである」⁸⁸⁾

そこで生物を大別すれば三種類に分けられることになる。

- (1) 栄養摂取と生殖という最低限の生命活動の原理は栄養的靈魂と呼ばれる。この栄養的靈魂しか持たない生物が植物である。
- (2) この栄養的靈魂に加えて、運動を司る感覚的靈魂も持つ生物が動物である。
- (3) 栄養的靈魂と感覚的靈魂に加えて、思惟 *noein* の原理である理性 *nous* をも有する生物が人間である。

問題は人間だけが持つとされる^{ヌース}理性の性格ならびにその位置づけである。

まず言えることは、植物の特徴である栄養摂取も、動物の特徴である運動もどちらも転化ということである。既に見たように転化は可能態から現実態への移行であるから、そこには変化の可能性として質料が潜んでいる。そこで、生物の活動の原理は靈魂であるから、その靈魂により栄養摂取や運動をする**身体は質料**とアリストテレスは考える。逆に言えば、身体という質料を、植物としての生命や動物としての生命へと現実化しているのが栄養的靈魂や感覚的靈魂であり、可能態にあるものを現実態にするのは形相であるから、**靈魂は身体**の**形相**ということになる。

「従って必然に靈魂は実体、それも可能的に生命をもつ自然的物体の形相という意味で実体であることになる。しかし実体は現実態である。従って靈魂はこのような自然的物体の現実態ということになる」⁸⁹⁾

既に見たように実体の第一義は個物であり、その個物の形相は第二義の意味での実体であった。そのことに今の引用を照らし合わせれば、靈魂は実体とは言っても第二義の意味での実体ということになる。つまり栄養的靈魂だけ、感覚的靈魂だけでは個物たり得ないのであって、あくまで、質料である身体と結びつくことで初めて第一義の意味での実体になるのである。

—— 栄養的靈魂プラス質料で植物。

—— 栄養的靈魂と感覚的靈魂プラス質料で動物。

すると栄養的靈魂も感覚的靈魂も質料である身体から切り離されたら、たちまち消滅してしまうことになる。だがアリストテレスはどうも「人間だけは例外」と考えていたようである。

「理性は何か実体であって、我々の中に生じて、そして滅びないものようである」⁹⁰⁾

どうということだろうか。

仮に理性が滅びないというなら、それは消滅の原因である質料を持っていないということである。だが仮にそうだとすると、「知識を獲得する」という単純な事実が説明できなくなってしまう。

—— 何かを知るということは知らない状態から知った状態へと移行することだ。例えば子供が言語を習得することは、可能的に話せる状態から現実に話せる状態への移行である。

—— すると我々は理性に変化の可能性を認めなければならない。つまり理性には質料的なものがあるはずだ。

理性における質料 —— 確かに『形而上学』にはそれを匂わせる言葉がある。

「……或る質料は感覺的質料であるが、他の或る質料は思惟的質料であるから……」⁹¹⁾

かくして、まず受動理性 *nous pathētikos* が措定されることになる。

「……理性が思惟されるものに対する関係は、感覺能力が感覺されるものに対する関係と同様でなければならない。従ってそれはあらゆるものを思惟するのであるから、アナクサゴラスの言うように、まじり気のないものでなくてはならない……従ってその本性は『可能なもの』という、そういう本性以外のものではないということになるだろう。従って靈魂のいわゆる理性(しかし私がここに理性と言うのは、靈魂がそれを以て思考し、判断するところのもののことである)は、思惟する以前は、現実的にはあるものども何ものでもないことになる」⁹²⁾

つまり「理性はどんな対象でも認識できる以上、可能態においてはいかなるものでもない」という理屈である。だがそれだけでは終わらない。何度も言うように可能態が現実態へと完成されるためには、既に現実態にあるものが存在していなければならない。まことに「現実態にあるものから、すべて生じてくるものは生じてくる」⁹³⁾のである。

—— 幼児は話すことはできないが話す能力を持っている。つまり言語について可能態にある。そんな幼児が実際に話すようになるのは周囲の大人たちが話しかけることによってである。つまり既に言語について現実態にある大人によって幼児は現実態へと引き上げられるのだ。

我々が何かを学び知識を獲得することも同じであろう。受動理性が知識について可能態である以上、それを現実態へと引き上げるものが別に存在しているはずなのだ。かくして能動理性 *nous poiētikos* も措定されねばならない。

「……自然全体のうちでは、或るものはそれぞれの類のための質料(そしてこれは可能態において、かのすべてのものどもであるところのものである)であり、他のものは原因であり、しかもちょうど術がその質料に対して果たすような役割を果たしながら、すべてのものを作ることによって作的原因であるから、[思惟的]靈魂においてもそれらの差異がなくてはならない。そして一

方の理性はすべてのものになることにおいて質料のようなものであり、他方の理性はすべてのものを作ることに於いて、その作的原因のようなものである……この理性も[質料から]分かれていて不受動的で混じり気のないもので、その本質から見れば現実活動である」⁹⁴⁾

困難なのはこの能動理性の正体である。

—— いま仮に人間一人一人にそれぞれ能動理性があるとしよう。さて、その能動理性は最初から現実態にある。そうでなければ受動理性と変わらないことになるから。

—— すると人間は生まれながらに知識や認識において完成されていることになるだろう。だがそんなことは絶対にない。我々は単純な計算でさえ往々にして間違えるではないか。

してみると能動理性は人間の外にあると考えねばならない。外にあるということは、質料である身体から分離して存続できるわけである。そして転化の原因である質料とは無縁ということは、永遠不変ということになるだろう。実際アリストテレスもそれらしいことを述べている。

「……理性は或る時には思惟しているが、或る時には思惟していないということはない。しかしそれは[身体から]分離された時、それがまさにあるところのものだけであり、そして[我々のうちにあるものどものうちでは]ただそれだけが不死であり永遠である(しかし我々に[この世の生活についての]記憶がないのは、それの方は不受動であり、受動理性の方は可滅的なものだからである)」⁹⁵⁾

これによると人間の形相である理性のうち、受動理性は身体と共に滅びるが、能動理性の方は不死と明言されている。するとどうなるか。

—— 不死だとすると、能動理性は神の実体ということになるだろう。なぜならそれは質料を持たない以上、不滅とはいえアイテールという質料を有する天体たちより、高貴ということになるから。

さすがに『靈魂論』はそこまでは述べていない。しかし、これまでの論理からすれば、能動理性を神の座に置くのが自然ではないだろうか。実際この問題は中世において知性単一説として西欧の大学で大いに議論されることになった。

かくしてアリストテレスは「事物そのもの」をあくまで事物に内在するものとした。

「……もし個々の事物よりほかになにもものも存在しないとすれば、なんらの思惟の対象も存在せず、存在するすべては感覚の対象のみであり、したがって(1)なにももの認識もないということになる。……なおまた(2)なんらの永遠なものも不変不動なものも存在しないということになる。なぜなら感覚の対象はすべて消滅するものであり、運動のうちにあるからである。だがそれのみでなく(3)もし永遠のものが全く存在しないなら、生成も不可能であろう。……だが、もしこのようなことがあり得ないとすれば、質料との結合体よりほかに必ず或るなにかが存在すべきである。それはすなわち型式 *morphē* であり形相 *eidos* である」¹⁰²⁾

これは、先ほどの一章四節での「なぜ実体について、個物とその形相というように二義を設ける必要があるのか」という疑問への別解でもある。

繰り返しになるが、プラトンのように地上の事物から離れたイデアに拠る限り、我々はその事物をいかにして認識できるのかかえって説明できなくなる。これは本性的に知ることを欲する動物である我々には絶対に見過ごせない問題である。

すると(1)地上の事物は確かに生成消滅するが、それでもやはり存在していると考えしかない。かくして個々の事物について、まず「実体」という概念が措定されることになる。すなわち個物としての第一義的な実体である。しかし、それは様々な転化をする以上、いつかは消滅する運命にある。その原因は質料を有しているからである。

となれば(2)個々の第一義の実体について、それら自体は消滅していくにもかかわらず、「これは馬である」とか「あれは鹿である」と種 *eidos* を述語づけるのは、「当の実体が有する質料とは別に何か不変なものが実体の中にある」と考えるしかない。かくして個物としての第一義の実体の認識において想定される何か不変なものをアリストテレスは形相 *eidos* と呼び、それもまた「ある」以上は実体としたわけである。

三節 観想的生活

ただし注意すべきは、事物についての認識を説明するため、その事物に措定された形相はあくまで第二義的意味での実体にすぎないということである。

—— いかなるものであれ地上の事物は四つの元素を質料としているため遅かれ早かれ消滅する運命にある。そのような儂い実体に内在する以上、その形相も共に消滅してしまう。

すると地上の感覚的事物については、認識とは言っても実は絶対に正確な認識は期待できないことになる。というのは認識とは事物の形相を把握することであるが、当の事物が生成しては消滅していくものである以上、そうした泡沫の如きものが秘めた形相を把握することは困難だからである。対象が第二義的意味での実体にすぎない以上、そうしたものの認識もしょせんは第二義的意味での認識ではない。あやふやな存在にはあやふやな認識しかあり得ないのだ。

「……個別的な感覚的な諸実体には定義もなく論証も存しないのである。そのゆえは、これら感覚的個物はそれぞれ質料を有し、しかもこの質料なるものは、本来、これを有するがために感覚的個物が存在することも存在しないことも可能なゆえんのものだからである。そしてこのように可能なものであるがゆえに個々の感覚的実体は消滅的なのである。ところで論証は必然的に[他ではありえない]物事に関することであり、学的な定義もまたそうであるとすれば、……かえってこのような他でもありうる事物に関するのは憶測 *doksa* であるとすれば、個々の感覚的な事物に関してなんらの定義も論証もありえないことは明らかである」¹⁰³⁾

このことは、神的能力を持ちながらも現実には地上に生きている人間としては、まことに耳の痛い話である。

—— 地上の感覚的実体はしょせん儂い存在であるから、そのような事物について可能な知識はせいぜい憶測にとどまる。

実体を対象とする理論学(この場合は地上界を対象にした『生成消滅論』とか『気象論』とか動物学系統などの自然学各論)にしてその程度なら、実体ではなく行為 *praxis* を対象とする実践学 *epistēmē praktikē* はなおさら蓋然的な知識しかもたらさないであろう。いわんや原理に踏み込むことなく、ただ手練手管を教えるだけの技芸 *technē* は知識 *epistēmē* でさえないので。

だが我々は知ることを求める動物である。理性的霊魂によって生きる限り、我々は憶測ではなく確実な知識を、それも究極の知識 *sophia* を求めてやまな

二節 アイデアの否定と形相

能動理性の正体は不明であるが、とにかくアリストテレスが人間の中にある神的な能力として理性を見ていたことは間違いないだろう。

理性を働かせるとき、その対象となるのはあくまで形相であって、それを秘めた事物ではないし、ましてやプラトンが説くような事物を超越したアイデアではなかった。そもそもアリストテレスに言わせれば、数であれアイデアであれ「いかなる普遍的なものも、その諸個物から離れて別には存在しえない」⁹⁶⁾のであり「感覚的な実体はすべて質料を持っている」⁹⁷⁾のである。ゆえにアイデアを否定して言う。

「……我々はエイドスとは袂を分かすべきである。

なぜなら、それは無意味なさえずりであり、たとえエイドスが存在するとしても、当面の議論には何の役にも立たないからである」⁹⁸⁾

なぜアイデアでは駄目なのだろうか。

彼は、プラトンがアイデア論に行き着いた理由について、こんな説明をしている。⁹⁹⁾

—— 若い頃、プラトンはクラテュロスの影響でヘラクレイトスの教説に染まった。それによると、この世界はまさに「万物は流転する」であって、何一つ留まるものはない。

—— だが認識とか知恵とかは或る何かについての認識であり知恵であるから、流転してやまないこの世界の感覚的事物については認識などありえないことになる。

—— やがてプラトンはソクラテスに師事するようになった。ソクラテスは自然探求には無関心で代わりに「正義」とか「善」とか「美」といった倫理的概念について普遍的な定義を人々に問うた。

—— これをプラトンは受け継いだ。ただし感覚的事物は生成流転しているから、事物の定義を事物から切り離し、それをアイデアと名づけて天の彼方に置いた。

この世界を生成流転の無常の世界と見ていたプラトンにとって、真に在るところのものとは天上のアイデアだった。アイデアこそが実体で、それに与る地上の事物は儚い影であり幻でしかなかった。

こうしたアイデア論についてアリストテレスは様々に批判しているが、中でも最大の疑問としているのは次のことである。

「とくに最も疑問とされてよいのは、そもそもエイドスが感覚的な事物に対して(永遠的なそれら

に対してもあるいは生成し消滅するそれらに対しても)どれほど役に立っているかという点である。なぜならエイドスは、これらの事物に対してそのいかなる運動や転化の原因でもないからである。のみならずそれは、他の事物を認識するのになんの役にも立たない。なぜならエイドスはこれらの事物の実体ではないからである」¹⁰⁰⁾

まことにその通りである。エイドすつまりアイデアが事物とは別に離れて存在しているなら、その事物をいかにして認識するのか我々はかえって説明できなくなってしまうのである。

いま仮に我々は四足の動物を見て「あれは馬である」と認識したとしよう。これがプラトンなら「我々は目の前にいる四足の動物を見ると、天上界にある馬のアイデアを想起して、それを基に目の前の動物を馬と認識するのだ」と言うだろう。しかし馬から離れて存在する「馬のアイデア」はあくまで「馬のアイデア」であって、現実に目の前にいる馬ではないはずだ。すると我々は、馬とは別の「馬のアイデア」を介して、いかにして目の前の動物を「馬」と認識できるのだろうか。

この疑問は既にアンチステネス(前 444 頃-365 頃)が示していた。いわく「私は馬を見るが、馬性は見ない」と。¹⁰¹⁾当然、アリストテレスはそれを知っていたはずである。そこでこう考えたのではないだろうか。

—— 何のことはない。プラトンの言うアイデアとは事物に「～自体」とつけて、天上に置いただけの代物ではないか。

—— 事物の認識とはその事物そのものについての認識のはずである。目の前にいる動物を「馬」と認識できるのは、あくまでも目の前にいる動物を見てのことだ。となればその「事物そのもの」がその事物に内在していると考えられない。

—— ただしヘラクレイトスが説いているように流動しているものは認識しようがない。ということは、事物に内在しているはずのこの「事物そのもの」は不変なはずだ。

—— 不変である以上は「事物そのもの」もまた実体と考えねばならない。ただし個々の事物こそ実体であるから、「事物そのもの」は第二義的な実体と考えるしかない。

いのである。となれば事物とともに滅びてしまう形相(第二義的意味での実体)ではなく、不滅の形相へと理性を傾注するしかない。

不滅の形相 —— それはいかなる質料も含まない純粹形相である不動の動者しかない。ただそこにおいてのみ形相はそのまま個物であるから従って第一義的意味での実体であり、永遠不変なるがゆえに、その認識は真に「在る」ものの認識なのである。

「……我々は物事の原因を知っていない限り、その真を知っているとは認めない。……派生的に真であるものどもにとっては、それらの真理性の原因たるものはそれ自ら最も高度に真なるものである。それゆえに、常に存在するものども原理は、それ自らが常に最も真なるものであることは必然である」¹⁰⁴⁾

まことに**永遠にして不変の存在こそ確実な存在であるから、それを知ることこそ最も確実な認識であり、ゆえに最高の真理なのである**。すると理論学の中でも不動の実体を対象とするメタフィジカこそ第一の哲学であり最高の学問ということになる。

「……もし神的なものがどこかにあるとすれば、それは明らかにあのような[独立、不動、永遠な]実在 *physis* のうちにあるべきであるから、そして最も尊い学は最も尊い類の存在を対象とすべきであるから。こうして一般に理論的な諸学は他の諸学よりもいっそう望ましいものであるが、理論的な諸学のうちではこの神学が最も望ましいものなのである」¹⁰⁵⁾

周知のように古代ギリシア人にとって「善さ」とは能力の卓越にあった。優れた能力を働かせるとき、そのものは「善い」とされた。だから滑らかに書ける筆は善い筆、よく切れる刀は善い刀だった。

同じ理屈は動物にも適用された。籠の中の鳥は飛ぶ能力を発揮できないし、動物園で飼われている馬は自由に駆け回ることができない。だからこれらは善い状態ではない。善い状態でない以上、とうてい幸福ではない。

さて人間とは理性的動物である。すると理性を働かせているときこそ、その人は善い状態にあるのであり、幸福なわけである。その理性とは物事の根源へと原理を究めて思惟する能力であるから、事物を単に事物として認識するのではなく、その根拠の次元から認識するとき、理性はより善く発揮されると言えよう。従って、そのとき人間はより幸福な

のである。ゆえに、およそ人間に生まれたからにはよろしく理性を発揮すべきであり、そうすることこそ、知ることを愛する動物として、真に人間らしい生活なのである。ゆえにアリストテレスは言う。

「…… 理性が人間に対して神的なものであるとすれば、理性に従った生活も人間的な生活に対して神的な生活であることになろう。……我々は……我々に許される限りにおいて不死なるものに近づき、我々自身の内にあるものうちで最高のものに従って生きるようあらゆる努力を尽くすべきである。……それぞれのものに固有なものはそれぞれのものにとって本性上もっとも優れたものであり、もっとも快いものなのである。従ってこの部分が他の何ものにもまさって人間であるといわれるに相応しいものであるとすれば、理性に従った生活こそ人間にとってもっとも優れた、もっとも快い生活であることになろう。それゆえ、それがもっとも幸福な生活でもある」¹⁰⁶⁾

ここに我々は生涯をピュシスの探求に傾けたアリストテレスの真情を見ることができる。

まことに**理性があるからには、我々は単に知るのではなく、より確実に知るように努めねばならない**。たとえ確実なものが分からないとしても、最高の対象に自らの能力を向けているとき、我々は最高に能力を発揮しているのであり、従って最も善くあるゆえに、最も幸福なのである。となれば我々は移ろいゆくものの知識で満足してはならない。永遠不変の真に在るもの、すなわちピュシスを探求すべきなのである。そのためには世俗の塵埃に馴染むことなく超然と星空を仰ぎ、天の彼方に理性を向けるべきである。すなわち観想的生活 *Bios theoretikos* である。まことに**永遠不変なものを考えることこそ、人間の最高の生活であり最高の幸福なのである**。

結論

哲学 —— この日本語の由来を思うたびに、筆者はそれがまさに意味するものとの見事な一致に感嘆せざるを得ない。

明治の初め、「愛知」を意味するフィロソフィア *Philosophia* を「哲学」と訳したのは西周(1829-1897)であった。その典拠は中世シナの周茂淑(1017-1073)の「聖希天 賢希聖 士希賢」すなわち「聖人は天

のようになりたいと願ひ、賢人は聖人のようになりたいと願ひ、士大夫は賢人のようになりたいと願う」という言葉である。つまり「人間たる者は少しでも賢くありたいと願っている」ということである。

西はこの言葉の最後の部分を探り、フィロソフィアを始めは「希賢学」と訳したが、希賢が危険に通じるからであろうか、「賢」を同じ意味の「哲」に置き換え「希哲学」、やがていつしか「哲学」で落ち着いた。今では漢字文化圏共通の訳語となっている。

士つまり知識人から賢人さらに聖人そして最後は天へと至るこの希求は、まさに事物の原理を究めんとして自然探求から始まり、ついには存在そのものまで問うに至った古代ギリシア人たちの思索の歩みそのものではないか。

人間は知ることを欲する動物である。だからこそ古代ギリシア人たちは自然現象に驚異の念を懐き、その謎を解明すべく探求を始めた。そして感覚では捉えられない不変なものがあることを直観し、それをピュシスと呼んだ。

——ピュシスの正体は何だろうか。

誰もがそれについて知りたい。だがピュシスについて確実な知識を得たいなら、まず、対象であるピュシスは確実に存在しているものでなければならない。というのは存在しないものは知りようがないからである。すると存在しているものについて正確に理解する必要がでてくる。

——何が存在しているものなのだろうか。

——ものはどのようにして存在しているのだろうか。

——そもそも存在とはどういうことなのだろうか。

いかなる知識も存在するものを対象とする以上、この問いはすべての学問探求の基礎のそのまた基礎ということになる。まことに実体の何たるかを解明する形而上学が第一の哲学と呼ばれる所以はここにある。

この問いに最初に自覚的に取り組んだ人物こそアリストテレスだった。その足跡である『形而上学』は極めて難解な書物である。概念が不鮮明なうえに論理が錯綜しており、アリストテレス自身の悪戦苦闘ぶりが随所に窺えるが、彼がそこに示した概念と見取り図は以後の形而上学的思索の道標となった。なかでも特に功績と言っているのは存在に多様性を認めたことだろう。

彼の師のプラトンでは真に存在するのはアイデアだけで、地上の事物はアイデアの影だった。だから事物が「在る」と言っても、それは在るのか無いのか分からない曖昧な存在であり、ゆえにその認識は曖昧な認識にすぎず、とうてい知識 *epistēmē* たり得なかった。

しかしアリストテレスにおいては存在は多様であるから、実体も多様であって当然である。だから永遠にして不変の実体もあれば、永遠にして運動する実体もあり、また時間的で運動する実体もあり、いずれもそれぞれ存在の度合いに応じて、それなりに認識の対象だった。

「……各々のものはそれぞれ、それが有する存在 *to einai* の度に応じて、真理をもっている」¹⁰⁷⁾

従ってそれぞれの実体にそれなりに学問 *epistēmē* が可能である。すなわち質料を有することにより運動をする実体たちについては、その運動の原理について自然学が展開されるし、実体たちの中でも理性に基づいて生きることができる人間の行為については倫理学 *ēthikē* や政治学 *politikē* などの実践学が可能となる。まことに彼こそは万学の祖と呼ばれるにふさわしい。

だが実践学は慣習 *ethos* や国制 *polis* といった本質的に時間的で相対的な人為 *nomos* の在るべき姿を問うものであるから、その知識は「多分そうである」とか「一般にそうなる傾向がある」という蓋然的なものに留まる。すると、およそ絶対に確実な知識を求める人間なら自ずと、蓋然的ではなく必然的な知識を与えてくれる理論学に向かうことになるろう。

だが理論学といっても自然学は感覚的実体たちの運動の仕組みを扱うだけだし、数学は数を扱うだけであって、それらの根本にある究極の原理は秘められたままである。そこで究極の原理として永遠不変な実体を対象とする学問が求められるわけで、かくして超 *meta* 自然学 *physica* が第一哲学として、あらゆる学問の基礎になるわけである。

「……いっそう高い意味において知識を持つ者はいっそう上位の原因から事物を知る者である。なぜなら[それ自体は他の原因によって]原因づけられない原因から事物を知る時、人はいっそう先のものから事物を知るからである。従って彼がいっそう高い意味において事物を知り、最高に事物を知る者であれば、かの知識もまた高い意味における知識であり、最高の知識であろう」¹⁰⁸⁾

最高の知識 —— 結局のところアリストテレスは第一哲学を完成させることはできなかったが、生涯にわたり理性を最高のものへ最大限に働かせ続けたのであるから、間違いなく彼は幸福な人であった。

ただ彼が、いくら論理の必然とはいえ、不動の動者を措定したことに、筆者はやはり釈然としないものを感じてしまうのである。

19世紀半ば、ニュートン力学に基づき天王星の摂動から未知の惑星の存在が推測され、その結果1846年に海王星が発見された。しかしその海王星にも摂動が見られることから、さらに第九惑星の存在が推測され、実際に1930年に冥王星が発見された。¹⁰⁹⁾

このように既知の天体の外に未知の天体を予測し実際に的中させた近代天文学の成果を思うにつけ、『形而上学』第十二卷(A巻)の論理とどうしても比べてしまうのである。

アリストテレスは、地上の実体が生成消滅する原因を、永遠ではあるが運動する天体たちに求めた。さらにそれら天体たちが運動する原因として、永遠にして不動の実体を天の彼方に想定し、かくして実体には三種類あるとした。

天体は感覚の対象であるから我々は地上界と天上界の関係について様々に理論を組み立てることができ。ここまではよい。だがその論理を天上界の彼方にまで拡張することははたして妥当なのだろうか。

—— そもそも星たちの運動の原因を、星空の彼方に置く必要があるのだろうか。

星たちの円運動を説明するために、アリストテレスは第五元素としてイテールを想定した。だが、どうせイテールの存在を力説するなら、そのイテールにもう一つ「自ずから動く」能力を追加すればよかったのである。そうすれば彼の体系は地上界と天上界というどちらも認識可能な二層構造ですっきり完結したはずである。

だが実際にアリストテレスがしたことは、天体たちが、たとえ円運動が永遠であれ、ともかく運動という変化をする原因を説明するために、それ自身にはいかなる質料も持たない純粋形相を天上界の彼方に措定することだった。プラトンやスペウシポスが唱えていたアイデアとか質料を持たない数は否定しながら、宇宙の原動力にだけは例外を認めたのである。これによりアリストテレスの世界は、最上層だけ認識不可能な三層構造になった。

しかし筆者に言わせれば、第一の動者に例外を認めることも、イテールに例外を認めることも、どちらも例外であることに変わりはない。どうせ例外を認めるなら、少しでも単純な方がましではないだろうか。となれば「天体たちが永遠にもかかわらず運動をしているのは、彼らが有する質料に永遠の運動をする性質があるからだ」とした方がいいのではないだろうか。

天上界の向こうがどうなっているのか、そんなことは誰にもわからない。そんな知識の射程外に全くの理屈だけで実体を捻り出したところで果たしてどれほどの蓋然性があるのだろうか。しかも、その実体は我が身一人の幸福に陶酔し、この世界には全く無関心なのだ。そんな実体が蓋然性どころか絶対確実な知識の基礎というのは何かおかしくないだろうか。認識できないものが認識の基礎というなら、そうしたものにに基づく認識などしよせん蓋然性の域を出ないはずである。してみると我々の認識にはどこかに限りあると考えるべきではないだろうか。実際、このことはアリストテレス自身も薄々と気付いていたように思われる。

「僭越にも人間が自らの分に応じた認識を求めるときをもって足れりとしめないのは正当ではないように思われる」¹¹⁰⁾

まことにその通りである。思うに自らの分を越えた認識を求めるとき、そこに生じるのは知識ではなく、もはや憶測ではないだろうか。こうした当然の疑問を懐く人々が古代においてもやはり現われた。それがピュロンを嚆矢とする懐疑派である。

脚注

- [1] 『ギリシア哲学者列伝』これについては後記の文献欄を参照せよ。上巻 pp.331-333。引用文のエイドスとはアイデアのこと。プラトンではエイドスとアイデアに区別はない。なお引用に際しては若干ではあるが、筆者の判断で表記や表現を変えたものもある。
- [2] 『形而上学』1巻9章992a30-992b1
- [3] 拙論『なぜソクラテスは逃げなかったのか』名寄市立大学紀要 第6巻1-2頁 2012年
- [4] 『国家』7巻13章532A-B
- [5] 『形而上学』1巻6章987b15-18
- [6] 拙論『プラトンの夢』の最終部分を参照。名寄市立大学紀要 第7巻21頁 2013年
- [7] 『形而上学』13巻6章1080b15-16「或る人々は、ただ数学的な数のみが存在し、これが諸存在のうちの第一のもので、感覚的事物からは離されて存在するとしている」
- [8] 『形而上学』14巻2章1090a8-14「しかし、このアイデアの説に様々な難点があるのを見てこの説に賛同せず、従って数を設定するにもこのアイデアの説にはよら

ないで、数学的な数を設定している者にとっては、なにを根拠としてこうした数学的な数を存在するものと確信する必要があるのか、またこうした数が他の事物に対してなんの役に立つというのか? というのは、こうした数を存在すると説く者はこの数をいかなるものの[原因である]とも言うておらず、かえって彼はその数をそれ自体で存在するところの或る实在 *physis* として説いていて、明らかになんらの原因であるとも認められないからである」

- [9] 『形而上学』13巻8章 1083a21-25「……或る他の人々が数に関して説明しているような仕方でも、なんら正しくは説明されていない。それは、アイデアを、端的に存在すると認めないだけでなく、数としてのアイデアのなんらかの存在をも認めないが、しかし数学的諸対象は存在すると考え、諸々の数は存在する諸事物のうちの第一のものであり、そして一そのものがこれら諸々の原理であると考えている人々のことである」
- [10] マリオ・リヴィオ『神は数学者か?』pp.35-36 早川書房 2011年
- [11] マリオ・リヴィオ『神は数学者か?』p.34 早川書房 2011年
- [12] 『ソクラテス以前哲学者断片集』第Ⅲ分冊pp.67-69 岩波書店 1997年
- [13] 『形而上学』13巻6章 1080b16-21「そしてピタゴラスの徒も一種類の数を、すなわち数学的な数を認めるが、ただしこの人々は、この数を離れて存在するものとしただけでなく、この数学的な数から感覚的な諸実体が合成されると言っている。けれど、彼らは全宇宙を諸々の数から作りあげているが、その数というのは、単位的な数ではなく、かえって彼らは単位そのものを或る大きさのあるものと解している」
- [14] 例えば『形而上学』13巻8章 1083b1「……数が離れて存するものであることはありえない」
- [15] 『生成消滅論』1巻2章 316a5-12
- [16] 安藤孝行『形而上学』p.20 勁草書房 1965年増補版
- [17] 『自然学』1巻1章 184a10-15
- [18] 『形而上学』1巻1章 980a22
- [19] 『形而上学』1巻1章 981b28-982a3「……いまここで我々が語ろうとするところはこうである。すなわち、知恵 *sophia* と名づけられるものは第一の原因や原理を対象とするものであるというのがすべての人の考えているところであるというにある。だからさきにも述べたように、経験家もただ単になんらかの感覚を持っているだけのものと比べれば、いっそう多く知恵ある者であり、だがこの経験家よりも技術家の方が、また職人よりも棟梁の方が、そして制作的な知よりも観想的な知の方が、いっそう多く知恵がある、と考えられるのである。さて、以上によって、知恵が或るなんらかの原因や原理を対象とする学 *epistēmē* であるということは明らかである」
- [20] 『形而上学』7巻1章 1028b3-8
- [21] 『形而上学』4巻2章 1003b16-19「……どのような場合でも、学 *epistēmē* は主として第一のものを——その他のものどもがこれに依存し、これによってそう呼ばれ理解されるところの第一のものを——対象としている。そこで、この第一のものが実体であるところの学の場合には、諸々の実体について、その原理や原因をとらえることが哲学者のなすべきことであろう」
- [22] 『形而上学』12巻1章 1069a30-1069a35
- [23] 『形而上学』4巻2章 1004a3-5「そして実体にいろいろの種類があるだけ、それだけ多くの部門が哲学にもある。……けれど、存在 *on* と一は直ちにそれ自らのうちに幾つかの類を持っている。それゆえに、これ

- らの類に応じてそれだけ多くの学があるはずである」
- [24] 『形而上学』12巻1章 1069a37-1069b2
- [25] 『形而上学』6巻1章 1026a14-20
- [26] 『形而上学』6巻1章 1026a28-33
- [27] 例えば『形而上学』4巻2章 1003a33 や7巻1章 1028a10 さらには13巻2章 1077b17 など。
- [28] 『形而上学』5巻7章 1017a8-1017b9
- [29] 『形而上学』5巻8章 1017b10-15
- [30] 『形而上学』5巻8章 1017b15-16「しかし他の意味では、このように他の基体の述語となることのない諸実体のうちに内在していて、これらの各々のそのように存在するゆえんの原因たるものを実体と言う」
- [31] 『形而上学』5巻8章 1017b24-26
- [32] 『形而上学』5巻11章 1019a5
- [33] 『カテゴリー論』5章 2a11-19
- [34] 『形而上学』6巻2章 1026a33-1026b2
- [35] 『形而上学』6巻2章 1026b14
- [36] 『形而上学』6巻4章 1027b26-28
- [37] 『形而上学』7巻1章 1028a10-15
- [38] 『形而上学』7巻3章 1029a8-9
- [39] 『形而上学』9巻1章 1045b25-35
- [40] 『形而上学』9巻1章 1046a9-11「しかし同じ種に属するそれらは、いずれもみな、或るなんらかの原理であり、それぞれ或る一つの第一の原理との関連においてデュナミスと言われるのである。そしてこの原理というのは、他のものの中にあり、または他のものとしてのそのもの自らのうちにあるところの、その転化の原理のことである」
- [41] 『形而上学』9巻8章 1050a8
- [42] 『形而上学』9巻8章 1050a9
- [43] 『自然学』1巻1章 184a17-22
- [44] 『自然学』2巻1章 192b14「……これら自然的諸存在の各々はそれぞれ自らのうちにその運動および停止の原理をもっている」また『形而上学』5巻4章 1015a14-16「第一の主要な意味での自然とは、それ自身としての自身のうちに運動の始原を有しているものどもの実体のことである」
- [45] 『自然学』2巻1章 192b21-23「或るもののピュシスとは、これ[運動と静止の原因]がその或るものの中に第一義的に、それ自体において、そして付帯的にではなしに、内属しているところのその或るものが運動したり静止することの原理であり原因である……」
- [46] 『自然学』3巻1章 200b12-15
- [47] 『自然学』5巻1章 225a1 また6巻3章 234b11
- [48] 『自然学』5巻1章 225a7-18「……転化には、基体から基体への転化と、基体から基体でないものへの転化と、基体でないものから基体への転化という三つの場合がなければならない。……さて基体でないものから、これに矛盾的に対立する基体への転化は生成である。……他方、基体から基体でないものへの転化は消滅であり……」
- [49] 『自然学』3巻1章 200b34「……転化するものが転化するのには常に、実体においてであるか、量においてであるか、性質においてであるか、場所においてであるかであり……」
- [50] 『自然学』3巻5章 205a6-7「……およそのもの転化するのとは反対のものから反対のものにであるから、例えば熱いものから寒いものにであるから」
- [51] 『自然学』5巻1章 225a34-225b2
- [52] 『自然学』3巻1章 201a10-15
- [53] 『自然学』4巻9章 217a21-26
- [54] 『形而上学』7巻10章 1036a9「質料はそれ自体は不可知である」
- [55] 『形而上学』8巻5章 1044b27-29

- [56] 『生成消滅論』2巻9章 335b30-31
- [57] 『自然学』8巻5章 257b7-10
- [58] 『自然学』3巻2章 202a10-13 また『形而上学』9巻8章 1049b25-29 ではこうある。「……可能的に存在するものから現実的に存在するものが生成するには、常に或る現実的に存在するものによってだからである。たとえば人間は人間からであり、教養的なものは教養的なものによってであるが、そこには、常に第一の動かす或るものがある。そしてこの動かす或るものは既に前もって現実的に存在している。……およそ生成する或る事物が生成するのは、或るものから、或るものに、或るものによってであり、そしてこの最後の或るものは、これによって生成するその或るものと種において同じものである」
- [59] 『自然学』8巻6章 260a13-14
- [60] 『形而上学』12巻2章 1069b24-26
- [61] 『生成消滅論』2巻3章 330b31-331a6 「ところで単純な物体は四つであるが、その各々は二つずつの対をなして、それぞれ二つの場所に属している(なぜなら火と空気は限界に向かって進んでゆく物体に属し、一方、土と水は中心に向かうものに属しているからである)また火と土は極限に存するものであり、最も混じりけのないものであるが、これに対し、水と空気は中心に位置し、上の二つに比べれば混合されたものである。しかも一方の対に属するそれぞれのは、他方の対のそれぞれのものに反対対立している(なぜなら火に対して水が、また空気に対しては土が反対なるものだからである。すなわち、これら対立しあうものは、相反する性質によって構成されているからである)……土は冷たいという性質よりもむしろ乾いているという性質によって特色づけられており、水は湿っているよりはむしろ冷たい性質によって、また空気は温かいというよりは湿っているという性質によって、そして火は乾いているというよりは温かいというように特色づけられているのである」
- [62] 『天体論』1巻8章 277a28-30 「また土は中心に近くなればなるほど速く動き、火は上部に近くなればなるほど速く動くということも、ものが不定のものへ動くのではないことの証拠である。しかるに、もしも運動が無限であるとしたら、速さもまた無限であるだろう、また速さが無限であるならば、重さも軽さも無限であるだろう」
- [63] 『自然学』8巻8章 263a3-4 「……直線上で逆戻りするものは停止しなければならない。それゆえ直線上では連続的で永遠な運動はありえない」
- [64] 『形而上学』7巻7章 1032a20-23 「およそ生成する事物は、自然によるものであれ技術によるものであれ、すべて質料をもっている。ただし、これらの事物の各々はこのように存在することも存在しないことともに可能なものであり、この可能性はこれらの各々に内在する質料にほかならないからである」
- [65] 『自然学』8巻9章 265a25-27 「……円的な運動は永遠でありうるが、その他の運動は移動にせよその他のどの運動にせよ永遠でありえない。なぜならその他のすべての運動においては停止が生じなければならず、もし停止が生ずれば、その運動は消滅したのである」
- [66] 『天体論』1巻2章 269a25-33
- [67] 『天体論』1巻3章 270a13-23
- [68] 『天体論』1巻12章 281b25-26 「……つねに存在するものはみな絶対に消滅しないものである。同様にまた生成しないものでもある」
- [69] 『天体論』2巻3章 286a8-13 「働きをもつものはそれぞれその働きのために存在する。ところが神の現実活動は不死である、つまり不断の生命である。したがって神的なものの運動は必然的に不断であらねばならない。しかるに天は、もちろん神的な物体である以上、こうしたものであるから、それゆえ天は本性上つねに円運動する丸い物体をもっているのである」
- [70] 『自然学』8巻1章 251a9-12
- [71] 『自然学』7巻1章 241b24
- [72] 『形而上学』9巻8章 1050b5
- [73] 『自然学』8巻5章 256a13-22 また『形而上学』11巻12章 1068b4-7
- [74] 『自然学』7巻1章 242a18-22
- [75] 『形而上学』12巻6章 1071b19-23 「……というのは可能的に存在するものは存在しないこともありうるからである。そうだとすると、その実体が現実態であるようなそのような或る原理が存在しなくてはならない。さらにこのような実体は、質料なしに存在するものであらねばならない。なぜなら、もし永遠的なものがあるとすれば、まさにこうした実体こそ永遠的であらねばならない。だから現実態である」
- [76] 『天体論』2巻12章 292a19-21 「我々はふつう星たちについては単に物体であり、また秩序はもっているが、まったく靈魂のない個体だと考えている。だがしかし星たちは行為と生命にあずかるものと解さなくてはならない」
- [77] 『天体論』1巻9章 279a17-23
- [78] 『形而上学』12巻9章 1074b25-35
- [79] 『形而上学』12巻7章 1072b15-17 「……この或るもの暮らしは、我々にとっても最善の、しかし我々にはほんのわずかの時しか楽しめないところの最善の生活である。というのは、このものは常にこのようにあるのだからである」
- [80] 『形而上学』12巻7章 1072a21-27
- [81] 『自然学』8巻6章 258b10-11 「運動は中断することなく常にあるのでなければならぬがゆえに、第一に動かすところの或る永遠なものが、一つにせよ多くにせよ、あり、この第一の動かすものは動かされえないものでなければならぬ」また『形而上学』4巻8章 1012b32 「というのは動いているものには常にこれを動かす或る者があり、しかもその第一の動者それ自らは不動であるから」
- [82] 『自然学』8巻6章 259b33-260a5
- [83] 『自然学』8巻6章 260a5-11
- [84] 『生成消滅論』2巻10章 336a32-336b9
- [85] 『動物部分論』2巻10章 656a6-13
- [86] 『靈魂論』2巻1章 412a13-15 「……自然的物体のうち或るものどもは生命を持ち、或るものどもはそれを持たない。そして我々が生命と言うのは自分自身の力による栄養摂取、成長、衰弱のことである」
- [87] 『靈魂論』2巻4章 415b9
- [88] 『靈魂論』2巻2章 413a22-26
- [89] 『靈魂論』2巻1章 412a20-22
- [90] 『靈魂論』1巻4章 408b19
- [91] 『形而上学』7巻11章 1037a5
- [92] 『靈魂論』3巻4章 429a17-24
- [93] 『靈魂論』3巻7章 431a3-4
- [94] 『靈魂論』3巻5章 430a10-18
- [95] 『靈魂論』3巻5章 430a22-25
- [96] 『形而上学』7巻16章 1040b27
- [97] 『形而上学』8巻1章 1042a26
- [98] 『分析論後書』1巻22章 83a33-34 ここでのエイドスとはイデアのことである。念のため。
- [99] 『形而上学』1巻6章 987a29-987b15 ならびに13巻4章 1078b13-33
- [100] 『形而上学』1巻9章 991a9-13 ならびに13巻5章

1079b12-16 このエイドスもイデアのことである。

[101] homepage2.nifty.com/eleutherion/lecture/.../node14.html によれば、この言葉はシンプリキオス『アリストテレス範疇論註解』208.30-32にあるらしい。アンチステネスは禁欲を説いたキュニコス派の開祖。有名なシノペのディオゲネスの師であり、プラトンから見れば同じソクラテスに学んだ兄弟弟子ということになる。

[102] 『形而上学』3巻4章 999b1-17

[103] 『形而上学』7巻15章 1039b28-1040a2

[104] 『形而上学』2巻1章 993b23-29

[105] 『形而上学』6巻1章 1026a20-23

[106] 『ニコマコス倫理学』10巻7章 1177b30-1178a8

[107] 『形而上学』2巻1章 993b31

[108] 『分析論後書』1巻9章 76a19-23

[109] ちなみに冥王星は2006年8月に準惑星に格下げされた。

[110] 『形而上学』1巻2章 982b32-33

文 献

ディオゲネス・ラエルティオス『ギリシア哲学者列伝』加来彰俊訳、岩波書店、(1984)

『アリストテレス全集』出隆ほか訳、岩波書店、1968-1973年

出隆『アリストテレス哲学入門』岩波書店、1972年

安藤孝行『形而上学』勁草書房、1965年

G.E.R.ロイド『アリストテレス』川田殖訳、みすず書房、1973年

G.マルティン『形而上学の源流』田中加夫訳、みすず書房、1978年

今道友信『アリストテレス 人類の知的遺産 8』講談社、昭和55年

Original paper

Aristotle's Survey of "Physis"

-From nature to super-nature -

Tokuo HURUMAKI*

Faculty of Health and Welfare Science, Department of education in the humanities, Nayoro City University

Abstract: Aristotle, a disciple of Plato, rejected the transcendental idea theory of his teacher and proposed a theory of form-matter instead. In this treatise, I consider what his ultimate principle of things is from some theoretical writings such as "Physica" and "Metaphysica".

Key words: Ousia, Dynamis and Energeia, Hylē and Eidos, Kinoun akinēton